

田川市の幼児の生活および家庭状況に関する調査

杉野 寿子*・池田 孝博**

要旨 新たに保育士に求められる子育て家庭の支援を行う上で、今日的な家庭について理解するための基礎的資料を得ることを目的として、田川市内の幼児の生活および家庭状況の調査を実施した。田川市内の幼児の保護者62名から得られたデータを分析した。生活リズムについては、就寝時刻が遅く、睡眠時間が短いことが危惧された。また、スクリーンタイムの在り方も生活リズムを考える上で重要になることが示唆された。家族とのコミュニケーションでは、団らん時間が確保できている家庭が1/2、そうでないと思われる家庭が1/4であった。食習慣と食環境については、それに対する意識が高い家庭とそうでない家庭に格差があることが窺えた。子どもの身体活動・運動については、どの家庭も高い意識を持っていることが窺えた。ただし、均整のとれた望ましい発育発達を促すための家庭支援が必要になるとと思われる。

キーワード 幼児、家庭支援、生活習慣、発育発達

1. はじめに

保育を取り巻く社会情勢が変化する中で実践力を有する保育士を養成するため、保育士養成課程等の見直しを行っていた保育士養成課程等検討会は、2017年12月に報告書を取りまとめた（保育士養成課程等検討会，2017）。その中には、「子どもの育ちや家庭への支援の充実」が掲げられ、以下のように述べられている。『『子どもの育ちの支援』の内容を充実させる観点から、子どもとその家庭の理解、子育て家庭への支援に関する保育士としての基本姿勢

や支援の内容、方法、技術等について、関連する教科目の教授内容等を体系的に整理した上で、子育て家庭への支援に関する中心的な教科目を新設することが必要である（前掲報告書9p)』。ここで求められる「子育て家庭への支援」については、社会的養護における家庭や保護者の支援に関わる状況に関連する事項が含まれており、児童虐待の現状やその背景、児童福祉法改正（平成28年）を踏まえた家族の再統合の支援に関する内容が含まれている。そして、新たに定められる保育士養成カリキュラムにおいては、これらの現代的な課題を丁寧に教授で

* 福岡県立大学人間社会学部・准教授

** 福岡県立大学人間社会学部・教授

きるよう、内容を充実することが求められている。ただ、このような支援の前提として、現代社会における家庭の実態・実情の傾向について理解・把握することは不可欠である。そこで本調査では、このように新たに保育士に求められる「子育て家庭への支援」を行う上で、家庭の状況の理解に資する基礎的資料を得るために、田川市内の幼児に関わる生活および家庭状況を確認することを目的として実施した。

2. 方法

1) 調査対象

調査の対象者は、田川市内の幼児の保護者である。アンケート調査では、本件とは別に幼児を対象とした身体活動に関する測定とのデータと同期する必要があったため記名式としたが、同期後に個人名に関わる情報を削除することや、調査研究以外の目的ではデータを使用しないこと、さらに、分析の際には調査対象者の全体的な傾向としてデータの処理を行うため、個人や個々の家庭の情報は特定されずプライバシーは保護されることなど、倫理的な配慮を行うことを書面で伝え、これらについて了解の上で回答・提出されたデータを分析対象とした。最終的に本調査の対象としたのは、研究の趣旨に同意して提出されたデータのうち、内容に不備がない62名の保護者から得られたデータである。

2) 調査項目

調査項目は、幼児の生活リズムに関するもの(就寝時刻、起床時刻、睡眠時間、スクリーンタイム)、家族とのコミュニケーションに関するもの(団らん、食事中的テレビ、食事中的会話)、食習慣・食環境に関するもの(朝食の摂

取、朝食の内容、間食の頻度と内容、外食の頻度、食事に関して気を付けること)、保護者自身の運動経験や意識、子どもの運動に関する意識を設定した。

3. 結果及び考察

1) 幼児の生活リズム

幼児の生活リズムとして、就寝時刻、起床時刻、睡眠時間、スクリーンタイムについて調査した結果を図1に示している。就寝時刻は37.1%の幼児が21時以前となっているが、その一方で21時台、22時台に床に就く幼児が半数を超えており、生活の夜型化が懸念される。他方、起床時刻は7時台が半数以上(53.2%)であるが、8時台も4.8%程度みられる。また、睡眠時間も62.9%が9時間以上確保しているものの、7～8時間が11.3%、8～9時間が25.8%となっており、就寝時刻の遅さが、睡眠時間の短縮化に影響していることが窺える。テレビ、ビデオ・DVD、ゲーム、コンピュータ類の画面を視聴する時間として、スクリーンタイムを調査した結果、1日2時間以上視聴している幼児は、半数近くに上っている。藤井(2017)は、子どもの生活リズムについては、就寝時刻の遅れと睡眠時間の短縮化およびテレビゲームやスマートフォン利用の長時間化があることを問題視している。隣谷(2015)は各種スクリーンの普及は利便性を向上させた一方で、子どもの遊びが「ヒト相手」から「モノ相手」へと変化させたが、そうならざるを得ない状況も生じていると指摘している。幼児の生活リズムの確立には、家庭内でのスクリーンタイムをどのように扱うかが課題となると思われる。

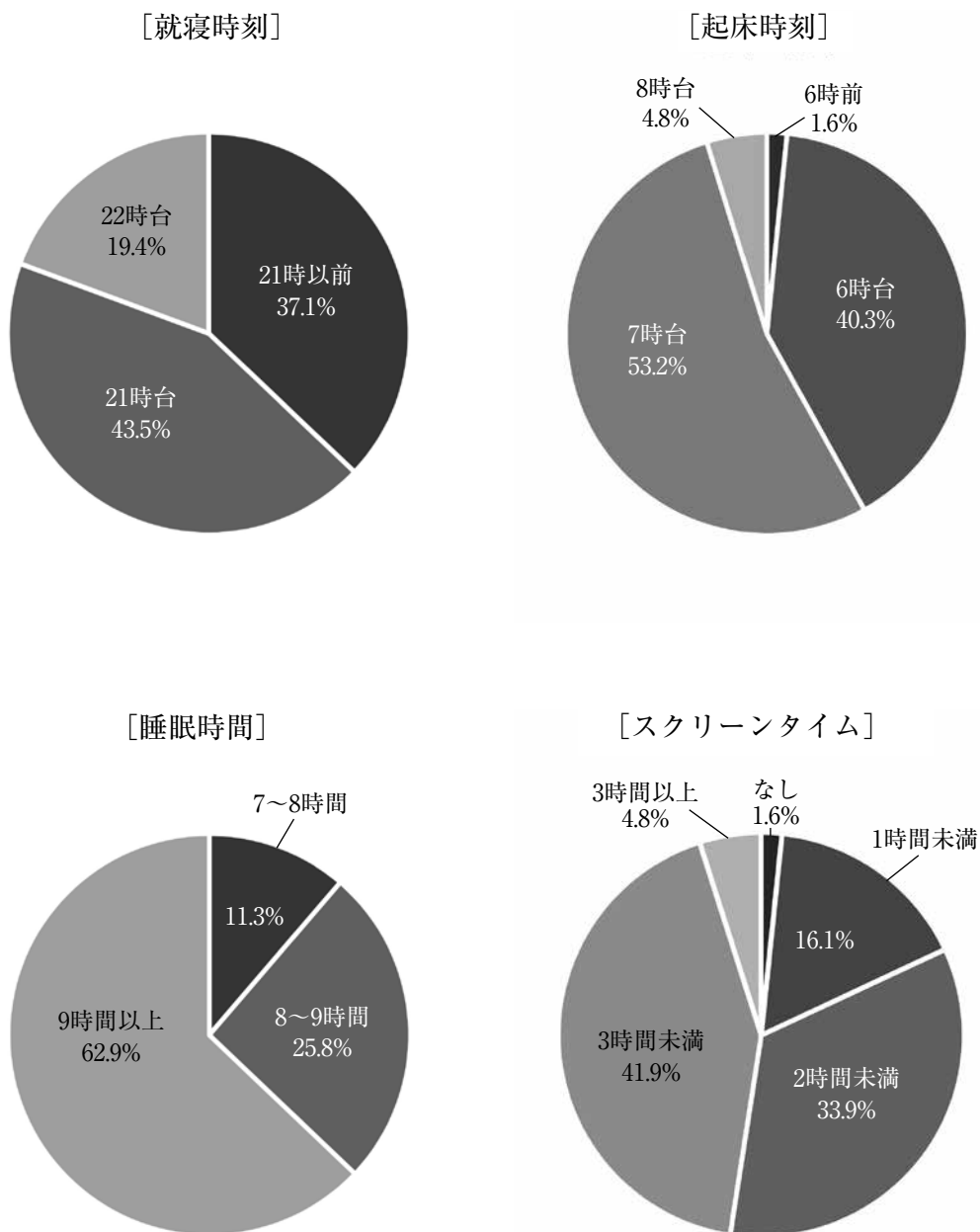


図1 生活リズムに関する調査結果

2) 家族とのコミュニケーション

家族とのコミュニケーションとして、食事時間以外の家族の団らん、食事中のテレビ視聴、食事中の会話について調査した結果を、図2に示している。家族の団らんでは、半数以上(54.8%)の家庭で毎日その時間が確保されているが、ほとんどなし(3.2%)、月1~2回(6.5%)および週1~2回(14.4%)を含めると、全体の1/4近くが家族の団らんの時間を確保できておらず、看過できない状況である。正岡・飯塚(2009)の調査によると、家庭の平日の団らん合計時間の平均は2.0時間であることが報告されている。この調査との単純比較はできないものの、団らん時間が少ない家庭におけるコミュニケーションの状況が危惧される。

次に、食事時間の過ごし方については、食事中、毎日テレビをつけている家庭は45.2%、週3~6回テレビをつける家庭は12.9%となり、多くの家庭で食事中にテレビを視聴していることがわかる。一方、食事中の会話については多いと答えている家庭が67.7%を占めている。松浦・池添(1991)の女子大学生の食行動調査によれば、食事中に4割以上の学生がテレビを視聴し、食事中の会話は2/3の者がしていることが報告されている。本研究の結果と類似しているこの報告から考えると、現代家庭において、食事をしながらの、テレビ視聴と会話は両立していることが予想される。むしろ、食事中のテレビは、家族の会話を弾ませるものとして役立っている可能性があり、テレビを見ながらの食事は、家庭内コミュニケーションの一つのスタイルとなっていると考えられる。

3) 食習慣・食環境

幼児の食習慣や食に関わる環境について調査するため、朝食の摂取、朝食の内容、間食の頻度と内容、外食の頻度、食事に関して気を付けることについて回答を求めた。結果の一部を図3に示している。朝食については、毎日摂取している家庭が90.3%でほとんどの家庭できちんと摂取されている。しかしながら、8.1%の家庭では週3~5日と、2日以上欠かす日があることが示されている。また、朝食の摂り方として、コンビニエンス・ストア(4.8%)、冷凍食品(8.1%)、外食(6.5%)と少数ではあるものの、これらを利用している家庭が見られた。また、間食の状況については、なしが1.6%、週1~3回は6.5%、週3~6回は17.7%で、毎日が最も多かった(74.2%)。間食の内容については、スナック菓子が48.4%で最も多く、次いで菓子パン(30.6%)であり、手作りおやつ(19.4%)、乳製品(12.9%)は2割に満たなかった。次に、外食の頻度では、月に1回が最も多く(30.6%)、次いで2週に1回(29.0%)、週1~2回(21.0%)の順に多かった。最後に、食事で気を付けることについては、「とても気を付ける」「気を付ける」を合わせると、手作りが最も多く(71.0%)、次いで栄養(66.1%)であった。これらに比較すると、手間や添加物は低い値(いずれも53.2%)であった。

幼児を持つ母親の食行動や食意識に関する山口ほか(1992)の報告によると、外食を行う主な理由には「家族団らんのため」であると述べられている。また、調理が面倒なためや調理時間がないための外食が2割以上見られたことも示されている。さらに、惣菜や調理済み食品の利用頻度も高い傾向を示し、利用者の偏りがみられることから、調理の二極化傾向が顕著に

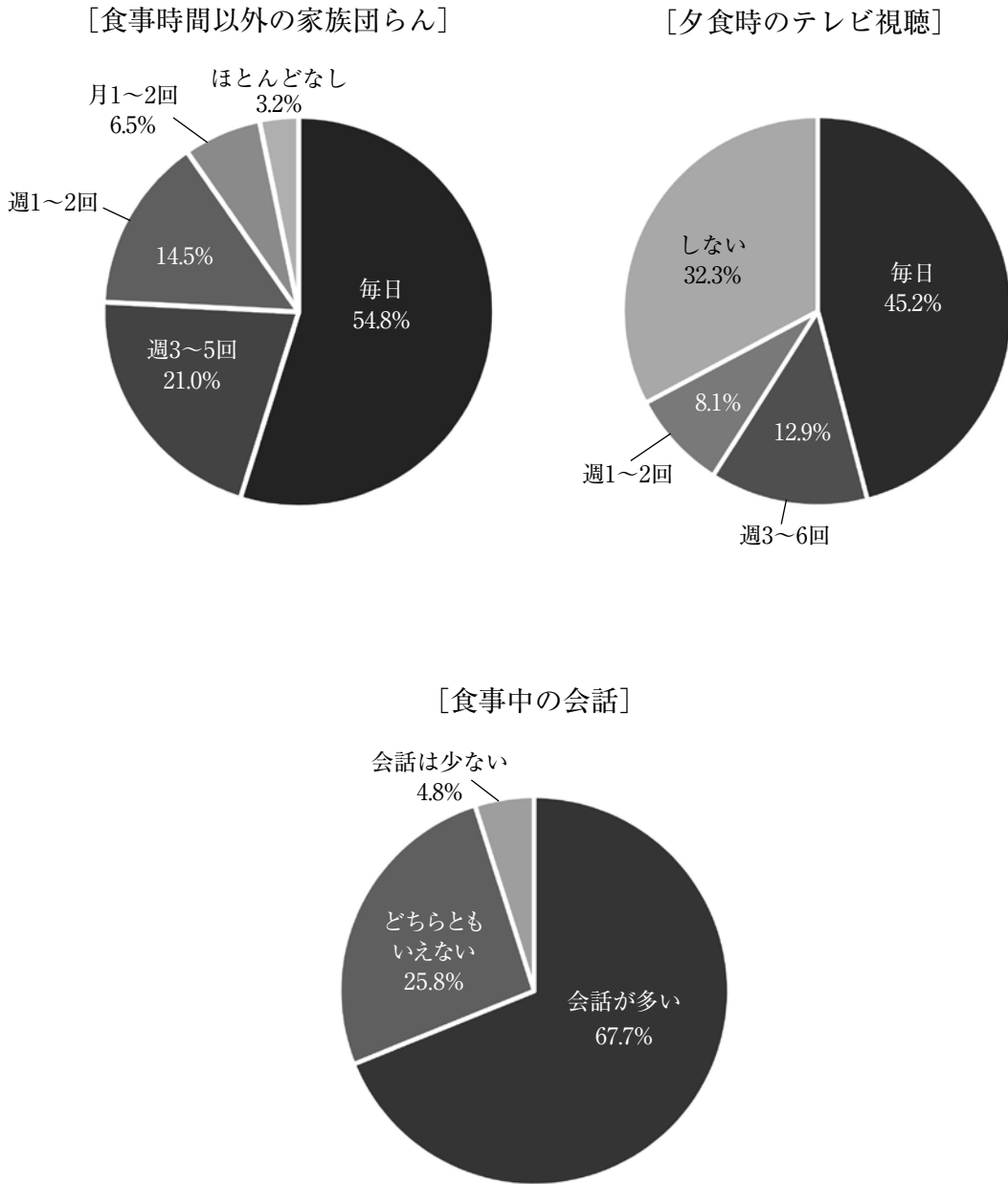


図2 家族とのコミュニケーションに関する調査結果

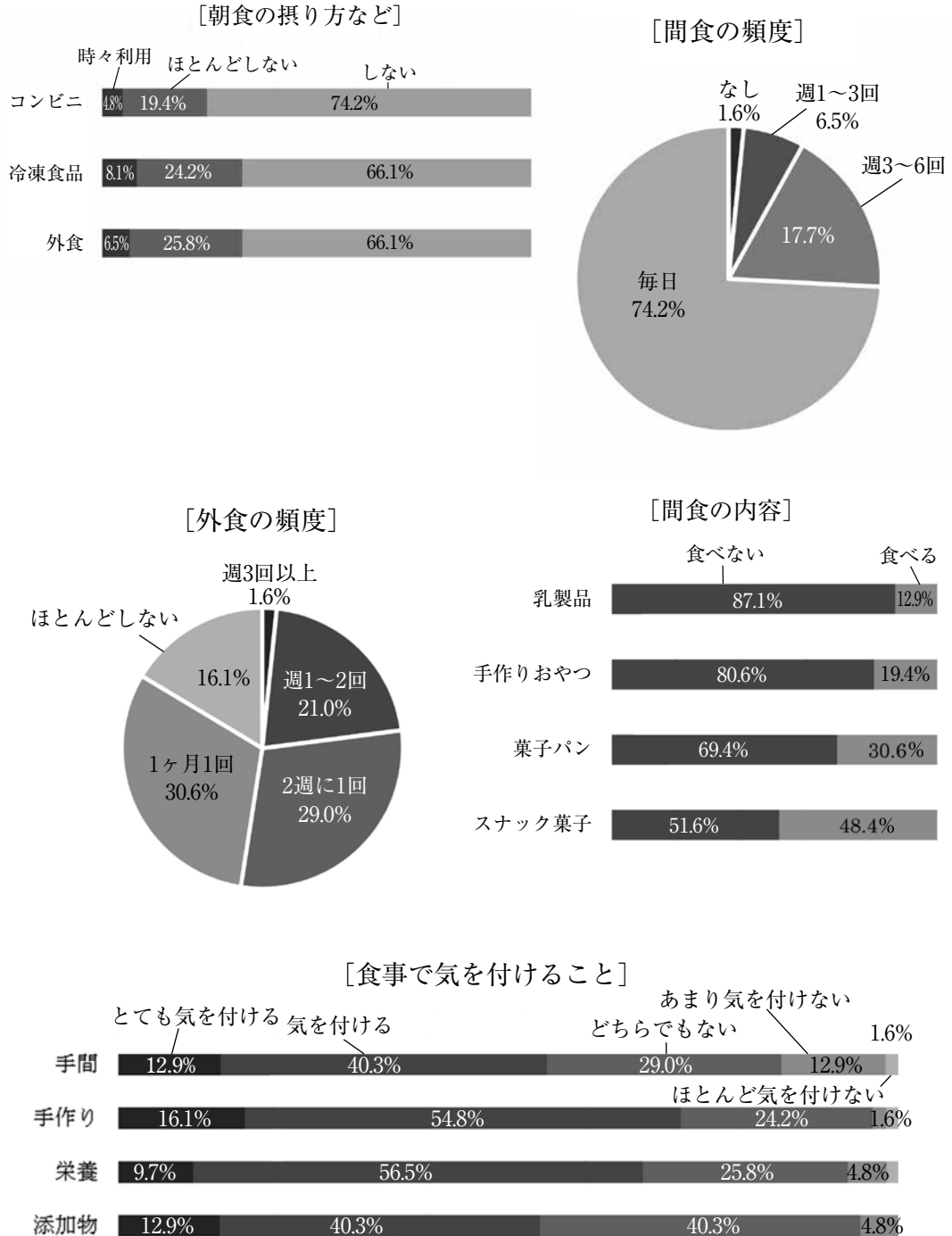


図3 食習慣・食環境に関する調査結果

なっていると述べられている。今回の調査結果については、保護者の仕事やきょうだい児の世話など、各家庭内の事情について詳細に調査をしていないため、一概に結果に関する問題点を指摘することはできない。しかしながら、朝食、間食、外食および食事において気を付けることについては、様々な家庭の状況が反映されていることが予想される。現代は様々な生活上の利便性が向上し、各家庭のニーズにこたえるサービスも多様である。そのため、保育者としての家庭支援を考える際には、多様化している食行動・食意識を踏まえる必要があると思われる。

4) 保護者自身の運動経験や意識と子どもの運動に関する意識

保護者のいずれかの、学生・生徒時代の部活動やスポーツクラブでの活動について回答を求めたところ、回答の66.1%が経験ありであった。また、保護者自身の現在の運動・スポーツ活動の実施状況では、実施していると答えた家庭は12.9%であった。また、保護者が在宅時に子どもと一緒に運動遊びをしているかについて回答を求めた結果、実施しているのは64.5%で

あった。運動に対する保護者の意識に関する結果は図4に示している。保護者自身は運動することを好きだと感じている家庭は、半数に満たなかった(48.4%)が、運動することの重要性を認識している家庭は、90%を超えていた。

子どもの運動に関する保護者の意識を確認するため、「①子どもにとって体力・運動能力を高めることは大事と思う(体力重視)」「②子どもの体力は低下していると思う(体力低下)」「③子どもの体力向上の取り組みは必要である(取り組み必要)」「④自分の子どもは運動が好きである(運動好き)」「⑤自分の子どもは運動が得意だと思う(運動得意)」「⑥自分の子どもにはスポーツに打ち込んでほしい(単一希望)」「⑦自分の子どもにはいろいろなスポーツを経験してほしい(経験希望)」の7項目を設定し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で回答を求めた。その結果、ほとんどの家庭が「非常にそう思う」「ややそう思う」の肯定的な回答であった。そこで、保護者自身の運動経験や意識と子どもの運動に関する意識の関連を検討した。関連の検討においては、これらの設問が順序尺度であるため、ス

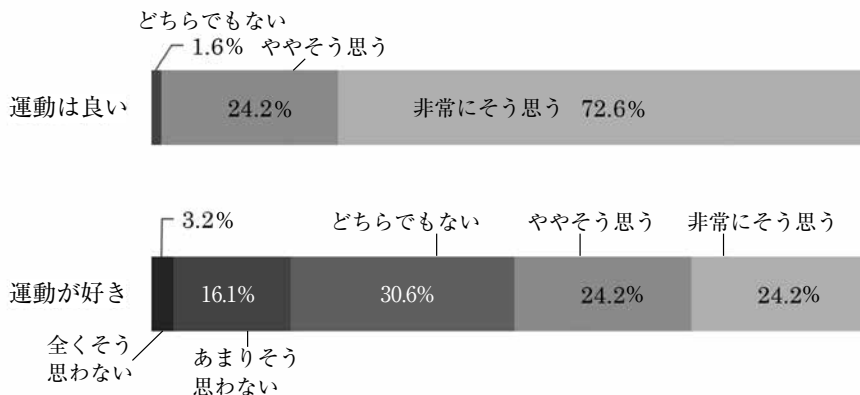


図4 保護者自身の運動に対する意識

ピアマンの順位相関係数を算出した。結果を表1に示している。体力重視と有意な関連が示されたのは、取り組み（相関係数0.281）、運動好き（0.405）、経験希望（0.366）であり、体力低下との有意な関連は、取り組み（0.316）、運動得意（0.262）であった。また、体力向上の取り組みについては、単一種目への打ち込み（0.262）、様々な種目経験（0.329）についても関連が認められた。また、自分の子どもが運動好きと運動得意の関連は最も大きく（0.719）、得意と単一種目希望にも関連が認められた（0.308）。このことから、子どもの体力を高めることを重視する保護者は、体力向上の取り組みの必要性を感じており、様々なスポーツ経験を望んでいると考えられる。また、自分の子どもが運動を得意としていないと認識している保護者ほど、体力向上に関する取り組みを希望していると思われる。一方、自分の子どもが運動を得意としていると考えている保護者は、一つのスポーツに打ち込むような取り組みを望んでいることも窺える。さらに、保護者自身の運動経験や意識との関連に注目すると、運動が好きな保護者ほど、体力を重視し、その向上のための取り組みを望む傾向にある。また、運動をよいものと考えている保護者は、子どもの体力を重視する傾向にある。そして、子どもと一緒に運動遊びを行っている保護者ほど、子どもは運動が得意であり、一つのスポーツに打ち込むことを望んでいる傾向が示された。保護者による子どもの身体活動・スポーツへの期待は、概ね良好な結果であったと思われる。しかしながら、中村（2011）は、これまでの発育発達研究の成果を踏まえて、子どもの運動能力低下の直接的な原因として「基本的な動作の未修得」と「運動量の減少」を挙げ、現在の子どもは運

動遊びの消失や単一スポーツのみの実施によって、運動動作の多様化・洗練化に関して未熟な段階にとどまっていることを指摘している。保護者が育った時代の運動に関する環境と比較すると、現代社会のそれは大きく変化していることから、均整のとれた運動機能発達のための環境づくりが必要であると思われる。

4. まとめ

本調査は、田川市内の幼児についての生活および家庭状況について、幼児の生活リズム、家族内のコミュニケーション、食習慣・食環境、保護者自身の運動経験や意識、子どもの運動に関する意識に焦点を絞って明らかにすることを目的とした。ただし、その結果の取り扱いや考察にあたっては、栄養学的にどのような内容の食事を摂取するか、あるいはスポーツ健康科学の視点でどのような運動がふさわしいのか、ということ論点にするのではなく、保育者が支援を行う前提として必要となる現代家庭の基礎的理解という観点で、幼児を取り巻く家庭状況を確認した。田川市内に在住する幼児の保護者62名から得られたデータについて分析した結果は、以下の通りである。

- 1) 生活リズムについては、就寝時刻が遅く、睡眠時間が短いことが危惧される。また、スクリーンタイムの在り方も生活リズムを考える上で重要になる。
- 2) 家族とのコミュニケーションでは、団らん時間が確保できている家庭が1/2、そうでないと思われる家庭が1/4であった。
- 3) 食習慣と食環境については、それに対する意識が高い家庭とそうでない家庭に格差があることが窺えた。

表1 保護自身の運動経験・運動に関する意識と子どもの運動に関する考え方の関連

	経験	好き	運動はよい	現在の運動	一緒に運動	体力重視	体力低下	取り組み	運動好き	運動得意	単一希望	経験希望
スポーツ経験	.489	.286	.064	.273	.068	.176	.144	-.044	.111	.090	.120	
運動が好き	.000	.434	.396	.194	.371	.200	.309	.218	.320	.061	.337	
運動はよい	.026	.000	.123	.088	.450	.119	.316	.241	.211	.233	.353	
現在の運動	.622	.002	.346	-.030	.151	-.147	-.016	.191	.166	-.044	.218	
子どもと一緒に運動	.037	.140	.510	.821	.091	.061	.253	.196	.336	.369	.142	
体力重視	.606	.004	.000	.249	.489	.021	.281	.405	.250	.089	.366	
体力低下	.182	.128	.371	.266	.645	.876	.316	-.158	-.262	.059	.039	
取り組み必要	.275	.017	.015	.907	.053	.030	.014	.174	.199	.262	.329	
子どもは運動好き	.738	.094	.064	.144	.134	.229	.184	.719	.092	.218		
子どもは運動が得意	.398	.013	.106	.206	.009	.043	.128	.000	.308	.180		
単一スポーツの取り組み	.494	.641	.073	.741	.004	.653	.043	.479	.016	.230		
様々なスポーツ経験	.361	.008	.006	.094	.279	.767	.010	.092	.165	.075		

註) 右上：スピアマンの順位相関係数 (太字は5%水準で有意な相関係数) 左下：有意確率

4) 子どもの身体活動・運動については、どの家庭も高い意識を持っていることが窺えた。ただし、均整のとれた望ましい発育発達を促すための家庭支援が必要である。

1992, pp11-20

これらの調査結果を参考に、保育士に求められている子育て家庭への支援について具体的に検討し、保育士養成課程における教育の充実にもつなげていくこととする。

参考文献

隣谷正範：現代の家庭における人間関係、保育と家庭支援論、学文社、2015、p31

中村和彦：子どもの運動能力の現状と課題－発育発達研究の立場から－。日本体育学会大会予稿集 62, 2011, p25

藤井千恵：幼児・児童・生徒の睡眠・生活リズムに関連する要因の検討。愛知教育大学研究報告。教育科学編 66, 2017, pp45-53

保育士養成課程等検討会：保育士養成課程等の見直しについて－より実践力のある保育士の養成に向けて－。厚生労働省、2017
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/houkokusyo_1.pdf

正岡さち・飯塚智子：世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究。島根大学教育学部紀要、教育科学・人文・社会科学・自然科学 42別冊, 2009, pp47-53

松浦美由紀・池添博彦：食行動に関する研究－女子学生の食行動について－。帯広大谷短期大学紀要 28, 1991, pp11-18

山口静枝・春木敏・原田昭子：食行動にみる食意識の構造分析（第1報）－幼児をもつ母親の食行動実態：幼児をもつ母親の食行動実態－。栄養学雑誌 50(1),